986

貞享天和 荒川武勇傳

下卷

朝月樓

實録文庫 荒河武勇傳 下の巻

東京　春風亭香雨編

却説城の助ハ大坂ヨリ岡平ガ為ニ殺害せられし趣を象川舎人より逐一上聞ヲ達せしバ義清朝臣も歎息なし玉ふの外ならざりしガ既ヲ城の助ガ四十九日の夜ヲ至り肥後の国大秀沈弥入来りしバ母とお菊の悦びいとん方ふく大秀ハ久々ヲて父上の安否を問んとするヲ母のも管いまれいさよ其方ハ何も知るまいと主水ガ横死城の助ガ殺害ヲ遇ひし事の一五一十物語れば大秀ハ痛哭し羅喉羅ガ佛涅槃を悲しむを思ハバ僧とても木偶ヲ非ず豈涙ヲからんやと胸を打て哀慟し愚子殺人刀を振て恪左衛門を截断せもんバ却て佛意ヲ背くべし小乗の殺生戒拘らヲ持佛の境界ヲ住くゆゑと勇猛の氣奮然として鬼神をも挫くべき勢ヲ母もお菊も力を得て少しい心を慰めけり恁て大秀ハ佛前ヲ向ひ讀經の聲清く廻向時を移しけるヲ越後の国川尻熊太郎尋ね来り各ヲ對面し飛札到著の砌ハ老父大病にて旅行の便を得ず師ヲ仕る本意ヲ背けりとて大秀と同ど日城の助ガ四十九日ヲ的り邂逅せし

そと奇あり是亡靈の引合せゑらん物り實ゑ両君の非命の死い痛哭のかぎりありと歎息ゑ
つゝ扨云やう我父與右衛門今い老病も再痊て矍鑠と健ゑる翁ゑ近頃外腹のおとゝ
覚次月潟より来りて同居一老父の意ゑ適〳〵彼ゑ孝養を委ねて我い大秀坊と同伴一俱ゑ
三宅と岡平が両兇を屠戮せんといふゑ大秀も悦びて小踊一つ急ぎ此由をお菊が父ゑる象川舎
人ゑ告一ゝ早速ゑ此席ゑ来會一両雄が熾ゑ復讐の思ひ立ゐるを賛成せるとて頻はし
て其朝舎人い登城一義清朝臣ゑ言上せるゑ殊の外喜悦ま一ま一聽て大秀熊太郎両人
ゑ目見を許され武術力量を試らゑ〳〵に大秀い例の禅杖をつゝて秘術を尽一熊太郎も
居合より始め刀劒の奥義をつゝひ次ゑ九尺柄十文字の竹槍をたゞき廣庭の隅ゑりける
五斗入許の土俵を自がけ聲と俱ゑ突通一一丈計を右上げ五度計鎗玉ゑかけて見せけれ義
清朝臣揃ひもそろひ一一對の英傑ゑ今此両士ゐるからい予ゑ於て満足ゑりゐられ仇ゑ早
く巡合ひ本懐を遂ぐべしと証文佩刀旅費を賜ひられ重ね〳〵の君恩を舎人も謝一奉り両
人も額つき悦び主水が旧宅ゑ飯り首途の日をトし大秀沙門川尻熊太郎い高田を発足ゑ

一山陽道を經て九州ゑ渉り既ゑ一て豊後の日田へ越んとする山陰ゑて日を暮一逞氣ゑる樵夫
ゑ誘ひ夫が家ゑ至り見るゑ谷蔭の一軒家ゑて託たるさまゑ見せながら囲炉裏の辺ゑ取散した
る酒器の類い唐物交りゑ物過ぎたりまゝ妻の衣類も絹の小袖を重ねたるやうに普通の樵
夫とい見えぬ若や山賊の住居なともゑや両人意を注て見廻ゑ鉄砲一挺此方ゑ掛たり改め見る
ゑ強茱ゑ弾さへ籠めたり両人い夫婦の見ざる隙ゑ手早〳〵弾茱を出一素知らぬ顔ゑて食事を
ちまひ時い九月の末旬ゑれども深山の寒氣堪がたしとて両人い早〳〵床ゑ入り態と熟睡ちたるさ
まを召ゑゑ既ゑ夜半と覚一き頃果て五人の荒男白刃を抜連れ込入ける大秀い豫て期したる
ことゑれば少も騒ゑ色がむと起き例の禅杖ゑり廻ゑ熊太郎い大手を廣げ的ゑる幸ひ投
付るゑ盗賊共い案ゑ相違一半死半生ゑ蠢く折ゑり縁端近き岩間よりドウと発てる鉄砲
の音い先れども弾ゑければ狼狽弾をこるゑんとゑるを大秀禅杖晃一打て蒐るを避んと一岩
根ゑ爪突倒る上ゑ登かつて蹈ゑどらんとゑる時川尻熊太郎い賊共の襟ゑみ引掴ミ大秀
はやりて殺一たまゑゑ恪左衛門岡平が踪跡を知るまゝきものゑも非ゑ敲きて糺問せらる

べし我も此奴を責て見んと恪左衛門岡平が人相年頃云聞せ彼等を汝い知らざるやと責懲して糺問をる夫婦かをる〳〵告るやう我等恪左衛門とてふものい実ふ存ぜぬ岡平と申たる者ふらんち碇ふ寅の文字を彫物せ〳〵関東者い我々の群ふ入て能働き〳〵今い瀧と申を屢ふて紺屋商賣つとを後家が入夫とあり是右衛門と云者今も密ふ江ら挿了を致をよ〳〵白状ふ及び〳〵ば二個い是を篤聞て去ば汝等が一命い助けて呉ん向後い良民とあるべしと教諭を加へ五人の手負を打殺し家と倶ふ火を放ちて焼失ひ夫婦の者ふ道を尋ね瀧の町へと赴きける○偖て二個い朝霧の深きふ道を迷ひやうやくふして午過る頃塩町近きむら

里ふ来り酒店ふ立寄り憩ひつゝ是右衛門がやうをを尋ね合を中究竟の壮士三三個同じ酒店ふ入来るよを主人に其一個ふ指差て尋ね玉ふ是右衛門いかの人ありと教ゆるふ大秀い人相書ふてら〳〵見て露違ねば打喜び尚もやうをを窺ふふぞ是右衛門い力自慢の癖のれば此家の庭ふ力試の石三ツ五ツかるを見て大秀等ふ向ひて云やう旅のあん僧ふ若く健みて大体あれば力かるべし此石をあげ試と玉へと物〳〵ひらけしを幸大秀いわざと卑下ふ先あん身が力ふて見せ玉へと望みしかば是式を何事らんぞきと袖をぬぎ両肌を露をを見れば彫物の注文寸分違ふぞ右の一指まと短れば大秀もとや猶豫ふ及ばず石をかげて誇りゐる利腕取て捻俯大音なげ作州の荒河城の助を浪

花にて手ふかけ物を奪ひ〜岡平い汝あらん我い九州ゑて成長〜城の助ゞ弟大秀あり ぞんじやう
ふ勝負せよとい〳〵是右衛門い打驚き我い岡平こやらゑい非をい〇話掘分明ある上い迚〜追す
まじと連の者共騒ぎ立るを熊太郎い押鎮めても既ふ厚の騒きともあらんとせ〜を全〜兄の仇討
あり こ云事明白ゑるふすり鎮りかゝつて見物も是右衛門も迚も追れぬ所こ覚悟〜岡平ゑるこ
こ白状もれぐさらゞ立揚て勝負せよ
こ引起もみ岡平い叶ハぬ近も切ぬけ
んこ大脇差を抜き放ち切て蒐るもち
ほら〜やこ大秀い禅杖を振上て二三
合戦ひ〜が岡平い眉間を打れ額二ふ
切裂れのたうち廻るを熊太郎い垣乃
枯竹を引抜きもふ殺て脇ざさみ主
殺ふい竹鉾が相應ゑれご出来合ふけ

れゞ是ゑて宥免〜て呉んと咽喉の邉を
突えぐり存分ふ苦痛させ狂死ふゞ
死せゝり斯て此事廈の司〜届出て勇
氣日頃ふ十倍〜夫すり肥前肥後を
經歴〜筑後の柳川ゑて春を迎〜中
国ふ皈り畿内をも尋ね伊勢のおん
神ふ詣で武運を祈り東海道ふ出で
鎌倉ふ至らんと来名より宮ふ渡る
七里の波濤日和よゝて伊勢や尾張の海面たつ浪もふく風静ふ舩い畳の上を行ゞ如〜半日の乗合
も百年の知已の思ひをふ〜口々の浮世咄もさまゝゝふる中ふ三州岡崎の人両三個江州の商人と三布
ぶとんの寝物語り扨も去年吉田の祭礼い近年ふふい張込ゑて固すり花火い年毎ふ新規の工夫を凝て
のゞ町内毎の見えゑるゞ尤去年い例こ違ひ砲術の先生ゑて西條の吉良すゞから抱〜たいと望まれ

程の浪人ゐて二木郡太夫といふ仁ゞ其花火の機関をーたのいゝ只事ゐゐらぢ前代未聞の見物でゐゐ
るーと語るを川尻耳ゐ留め大秀ゐ目配せあー何とゐ〳〵新ゐ事寄せ二木ゞ人相を問ひ試むるゐ
眉の疵さ違ねゞ扨こそ三宅ありこ思ふ尚委ーくやうを聞ゞ其郡太夫といふ先生ハ其頃吉田
の備中や興兵衛と申を旅籠屋ゐ泊られて花火を製られーゞ其後の事存せぢといふゐ両個密
ゐ談ぢるゝ兎ゐ角備中屋がり尋ね
往き探偵せんと勿論ありこ舩ハ間
もゐ〳〵宮の驛ゐ著ーらゞ十里の道を
直走ゐ其夜吉田の備中屋ゐ一宿ー二
木ゞとを探り見るゐ生れハ九州の者
にーて砲術剣槍の達人ゐて既ゐ東條
西條よりも召れーらゞも應ぜぢーて
九月の下旬當地を発ー鎌倉の元郷

知己の方へ参られーと語るゐ両個ハ歎
息ー去ゞ是より跡を追ひ彼ゞ行方を
探さんとて翌朝より鎌倉をさー赴
きーゞ大秀ハ鎌倉駒ケ谷の吉兆院の
看主石鹿とゐ僧ハ我師大蓮和尚の
法脉ゐるを思ひ出ー是を尋ね誠を告
げ暫此寺ゐ身を寄せて日々ゐ敵を探
しけり⊙却説三宅惟左衛門ハ久ーく京
都ゐ匿れーゞ鎌倉をさー下る途中三州吉田ゐ逗留中花火の術より名高くゐり吉良家ゐ召さんとは
るーらゞ上方近きゐ便宜あらねゞとて鎌倉ゐ至り二木郡太夫と稱ー頻ゐ仕官の望をなを中出羽秋
田の城主安東太郎貞季ハ出羽一国の守護職ゐて威權ハ大諸侯ゐも劣らぢ代々武勇の家柄ゐて
弓馬刀槍の達人臣下ゐ欠乏かゝらざれども未砲術ゐ秀たる者ゐらざる所へ二木郡太夫彼術をもて

仕官の旨を望みしに貞季在国あれば鎌倉の邸より人を附け本国へ遣はせ霜月の下旬より出で郡太夫へ出羽に至り貞季に目見をし其日廣庭に於て砲術を施すに其業最も精しけれべとて貞季斜ならず喜悦し禄高三百石に抱へ足軽の師範とはなされ〻り然るに新規を愛で珍しきを悦ぶは人情あれば二木が刀槍の弟子となる者もほりて何方にても二木が噂は高〻

〻と数に大秀熊太郎は此年も暮れ又の年正月中旬迄も何の手懸りも得ざる所へ奥羽より出て此吉兆院へ投宿せし透巌と云雲衲石鹿長老の知己にて一夜芳茶を味ひ閑談数刻まゝに二木が砲術に奇巧を見せる取沙汰を語り出るを聞き郡太夫と云名も変らねべ猶委く聞糺し熊太郎に斯と

告げ石鹿長老に暇を乞ひ二月八日羽州をさして旅立ける日数八日を経て羽州に達し同国門吉村と云へば既に城下へ三里に過ぎされども固より山中にて道険しく十歩一歩と登り行くに百姓猟師うち交り領主の命にて山犬狩をなすとて種々の器械を携へ其処此処に屯して両個の山に登らんとせるを見て我等既に山犬を九分通へ殺し尽せしが雌雄二匹の古狼神通を得たりしに弓矢砲弾さへ受付ぬ旅人砌に撫で玉に過ぎつゝ吠らずと留るに両個も大事を抱へ身なるにぞさもはらんと思へども火急の用にて漫に茲に杖を留めずとて所へ牝牡の狼阪を下て荒に荒て飛来るに百姓共へ色を失ひて轉びつ逃出せに大秀熊太郎は道を避るの隙もなけれべ大秀は禅杖熊太郎は刀を引抜き身構へし

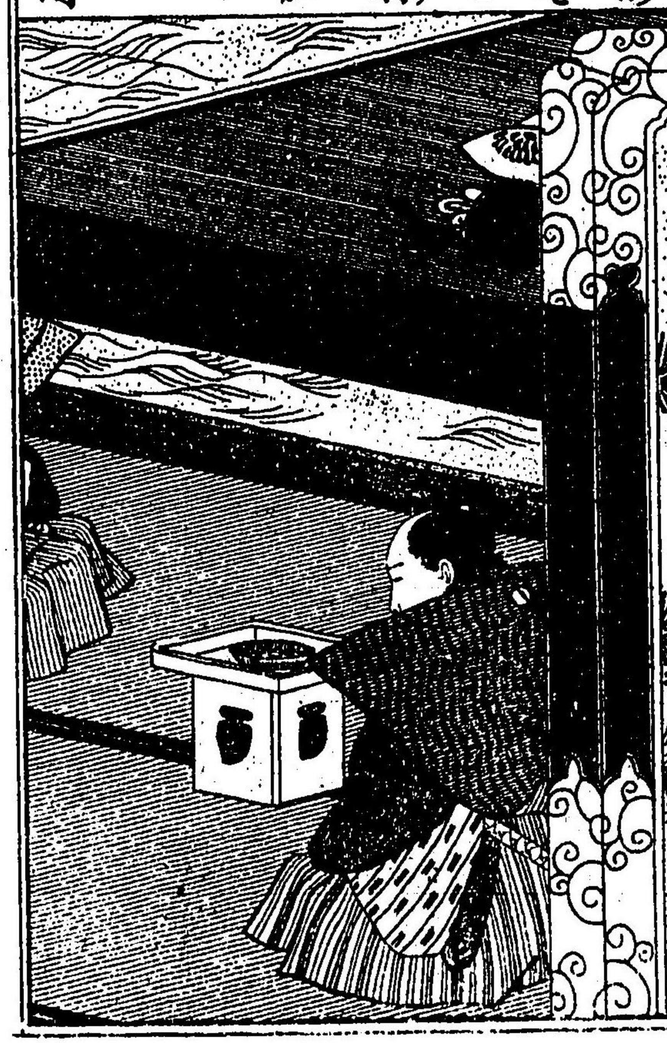
て待所へ一匹の眼を怒らせ大秀へ飛蒐るを鐵杖ふて打留れば一丈余も飛上り直ふ後より嚙付て身をかへ一さま打込む杖ふ背骨を碎かれひるむ所を付入て頭を微塵ふ碎き々り又熊太郎へ狼を遣達ひさまふぎ討ふ頭を耳の根へかけ尺一刀ふ截落すを百姓獵師へ斯と見て其早業ふ感ド々り両人夫より跡をも見ぎ行過ぎあんとする所を門吉村の長正右衛門此場ふ来り両個の手柄を賞し是非ふ我家へ誘へんと云ふを幸城下の便宜を得る手掛ふもあらんと思へば云ぐ随意引れ行くふ山家ふぎら手厚く饗し扨両個が姓名法号委しく記して狼の死骸とこもふ領主安東侯へ捧ぐんとするを両個へ名を出さんを厭ふ者ゝら此村内の功ふせよとてふ正右衛門感服ふし去ふぎら君達の功を盜む義に

反きて心ふらねど厚志ふ悖るへ失敬ならんと遂ふ村中の功とす其夜城中へ届らば翌朝ふ至り領主其手柄を賞め白米百俵鳥目百貫文を賜ゆりければ正右衛門へ是を村中へ分配し尚小判十五枚を川尻大秀ふ謝礼ありとて出しければ両個へ志をのこ受け金ふへ手たも觸ざるを正右衛門益其清廉を感稱し鄉食應始ふまとり々り斯して正右衛門へ大秀の顔つゝ詠め悼ふぎら貴僧ふへ當国山形ふて荒河氏の申たりし人ふ御由縁へのらざるやとへふふ大秀驚きて然りと答ふ去ぎふ咄申をゞし野生へ小野寺家の御藩中荒河玄蕃さまふ十三戈の年まで草履取を致せし者貴僧の面ざし玄蕃さまふ似たるより過し往古を思ひ出しゝと涙ぐこつゝ物語るふ大秀も意外のとふ驚きつ此公羽の言語のやうを老實

あるう（から包まむ真事を明せども損あくして益多からんと早くも胸ふ浮びしうづ熊太郎聞き合主人の察し玉ふ如く愚衲い則其玄蕃が孫ふてゆ附て（談むる）義もなれば左右の人を退け玉へとゆに応右衛門心得て躰て二人鼎ふあれば大秀い父主水の来歴よりして父兄の仇討ふ出たる始末を熊太郎とかさみ変りふ物語り透厳の一話ふより急ぎ當国ふ来りし由述べれば応右衛門（或い歎し或い泣き或い勇み或い喜びその透厳といふ僧これ将我二男ふて幼少の時より出家を好み今諸国行脚り出ゆあり彼が無心の一夕話ふ旧主僕邂逅の因とある實ふ奇ありと云られば両個再驚きて重覆の縁ふ感じ人相書をを遣送して猶三宅が實否を糺さんとをたのむふ応右衛門仰

ふくも御両君の仇討させまゐらせひで歇ものらこ又の日礼物を調（秋田）行き家老郡代諸役所（礼廻）りを済せ二木の屋敷ふて（対面）をを乞て狼狽の一礼ふ参上せりとて目録酒肴過分ふ調（たる）を差出せば貪慾ふる郡太夫ふこと喜び村長抔ふも思ひ付れんと思（ば応右衛門を饗應し藝術自慢の味噌吸物吸口の獨活芽鷹の目犬とも志〜て互ゞ酒ふ酔てうゞ〜ご問れて肥前の産れのと（り）火術い武衛流太刀い直心鎗い種田年い四十八ゆれども壮年ふ劣らぎと語る聲の調子より容貌注文ふ少も違いぎ衣類いか（紋ふて丸ふ三の字本名いもも）や問ふ及ばぎ此奴のたばかりで誘き出さんと呂ふ（ふ）さま〜の談の中田舎ふても御城下ふ優るものい花紅葉い更ふり春さきのつ

ゝ蕨山家の景色も適ふゝ御保養ふあり゛ゅゝん山櫻御覧ーがてら一度お出が願ひたー追從たらゞ日暮つ方ふ秋田の城を出けるゞ急ぎ宿所ふ帰り今日の事ども委ーく告げ二木郡太夫ゝ三宅惣左衛門ふ疑ひふー迄きふ吉祥日をえらみ渠を欺き寄ゅゝんふ本望を遂させ玉へと云ふ両個の喜びいゝ方ふ中儲仇討の場所いこれ是の所宜ーゝゝんと談合ー則三月十八日ニ右衛門ゝ又二木ゞ屋敷ふ至り既ふ庭前の櫻滿開ー旦ゝそゝゝ珍看をも得て明日ゝ是非御来臨下ざるべーと云ふ郡太夫ゝ打喜び去ゞ一両人朋友をも伴ひ未明より出で道すがの風景をも賞ー必四ツ時ふゝ参るべーと約束ふーニ右衛門をかーゝり



ゝ茲ふ又大秀川尻の両個ゝニ右衛門ゝ左右を聞き髪を梳り剃髪ー沐浴ふ身を清め神を拝ー曠著を服ー恩賜の太刀の柄たむを合て腰ふ横たへ村外れある庚申堂の背ふ隠れて待といゝらゞ二木郡太夫朋友富山和中太とつゝをさそひ若党三人仲間三人上下八人ざんざめかー瓢簞の一酒一看こふかーこふ開き微酔機嫌鼻唄うたひて来る所を堂の后を駈出て大道ふツゝと立ーゝ大秀沙弥天地ふ響ー大音ふて夫ふるゝ元美作高田の家士三宅惣右衛門と子細ふつて知る四ヶ年以前荒河主水を卑怯ふも鉄砲を以て闇討ー逐電せし事覚えたらん主水ゞ二男圓次郎父の命ふより出家せーと雖兄城の助途中ふて悪僕岡平ふ弑せられーふより當分還俗の沙弥大秀こふかり先ゞんゞせうふ勝負をせよゝ

禅杖もつて大地を突き鐸よどまれ呼ばれば跡ゐ續く熊太郎我ハ主水が門人越後の川尻熊太郎師恩ハ親ゐ等しよつて大秀が助太刀ゐ立たり奈何ゐ大秀三宅が朋友下人等い幾人ゐるとも此熊太郎関りて一人も餘さず討取ん決ハ恪左衛門と心静に交戦せよ立騒いで妨げをるナ其処退ぞやと和中太若党下部等の真中へ無二無三ゐ切込だり郡太夫ハ大秀ゐ押詰られつ胸をつぶし開ハ定て人違ひそろ事して後悔をゐと云つ小徑ゐ逃んとをるを此期ゐ及で逃んとをるハ小兒ゐ等き憶病者兄岡平も豊前ゐて討取たり汝逃ども逃さうや侍士らしく實名名乗て勝負を決せよと恥しめられて郡太夫も遁れぬ所と覚悟をゐ〻いらゐも三宅恪右衛門ハ斯いゐ二水郡太夫ゐり親の敵と付覘ふやさしき心を不便ゐ思へバ一刀ゐ返討ゐ此世の暇を取して呉んと身構へゐ三尺一寸の刀を拔放ち真向ゐかざし打て蒐るを大秀得たりと禅杖を麻売の如くかるつらひ火花を散してうち合ゐり此時しも和中太ハ熊太郎を截捨て郡太夫ゐ助太刀せんと心ハ矢猛ゐもせれども刀ハ辛く拔たれども熊太郎が強氣ゐ呑れ怕れ立向ふを尺一刀ゐ右の肩先切下げて倒るゝ所を蹈越て若党共が立向ふを大袈裟胴切から竹割と見る間ゐ三人切俯せるゐ仲間共ハ柄ゐ手を掛でも竹光拔ぬ太刀光明遍照十方へかけ逃げあたりゐ人いゐ大秀と恪右衛門ハ互ゆまぬ秘術を尽し半時ばかりも戦ひしが遂ゐ三宅ハ受太刀とあり〻を力を究めてうち込む禅杖受得たれども鍔元より刀ハほつきと折れそきび鉄杖ハ眉間をかすりこハ口惜と恪左衛門差添ぬかんとをる隙ゐ大秀打込む二の棒ハ耳の元より右の肩を打まるれば恪左衛門ハ眼くるめき尻居ゐドッと仆るゝを透さず大秀刀を引拔き右の肩先より肋へかけてゐりかへり叔父も一刀恨ゝ玉へと熊太郎心得たりと罪を責め左の肩を切り付け退けバ大秀ハ変りて首打ち落し流水ゐて洗ひ浄め父兄の位牌を取出し備へて復讐のよしを告げ両個合掌三拝して流るゝ涙雨の如し忠右衛門ハ駈来り扇を以てなぶりたゝ先両個を我家へ伴ひ郡太夫が死骸ハ村人ゐ護らせ且和中太をいたさらせ秋田ゐたせ行仇討の始末を訴へけり去れど両人を道すきせしとハ秘していまゞ斯て安東家よりハ見分の上詮義のり和中太ハ今更よしゐき助太刀を悔悟し其夜のうちゐ息絶えてりさて

両個ふい山名家の証書もありて確實あれば是より郡太夫が奸曲もなきらかふ露れ一ゥ領主の命にて熊太郎ふ仕官をもとめらるゝといへども固く辞退しければ大秀もろとも懇ふる饗應ふなひ引手物を賜ひ秋田を出て山右衛門とともふ祖父玄蕃の墓ふまゐりで大法會を執行しめでたく本国へかゝるふお菅お菊が悦び舎人どもふ無事を祝し主君へきこえなげて目見の後かえるゝふ仇討の序次を語りければ義清朝臣い感賞かぎりふく大秀い還俗熊太郎い仕官せよとをゝめらるれども承諾ぞ一い國ふかへつて老父ふ仕へい身を雲水ふまゐらせて道徳を増さんとを城の助ゲこもれがゝみの六の助父祖の家を相續しこれまゝ大力武藝千人ふも抽んでたりとふんめでたし

實録文庫　荒河武勇傳下の巻終

NO.1　明治十七年十月廿一日御届　同十八年三月出版

編輯兼出版人　岐阜縣平民　春陽堂　和田篤太郎　京橋區南傳馬町一丁目十四番地

實録文庫
同　白子屋お駒大岡政談　全二冊　定價金十錢
同　南總里見八犬傳　全二冊　定價金十錢
同　萓屋喜八大岡政談　全二冊　定價金十錢
同　赤垣源藏德利の傳　全二冊　定價金十錢
同　佐野、鹿藏英勇傳　全二冊　定價金十錢
同　荒川武勇傳　全二冊　定價金十錢
同　宮本無三四二刀傳　全二冊　定價金十錢
花茨露の面影　全四冊　一冊五十錢
春迺錦戀の妻折　全三冊　一冊三十九錢
三巴戀迺白雪　全三冊　定價三十九錢
園花匂姫垣　全二冊　定價二十六錢
八重櫻里迺夕暮　全二冊　定價二十六錢
八重戀路迺葛羅ぐすき　全二冊　定價二十六錢
小三娘節用　全一冊　定價金四十錢
金五娘節用　全一冊　定價金四十錢
續編若美登里　全一冊　定價金四十錢
おくま二郎江戸紫　全一冊　定價金
實説合鏡心乃妍醜　全一冊　定價金三十錢
艶話近世月雪花戀路の踏分　全三冊　價金六十錢
奇縁海南第一勇士汗血千里駒　全三冊　定價五十四錢
異國奇談和荘兵衛　全一冊　定價金八十錢